

無歯顎者の模型分類と 活用の考察

大野健夫氏（宮城県白石市開業白山デンタルラボラトリー総義歯研究所）考案である、人工歯排列のガイドライン「等脚台形法」の考え方に ついての概略と、これを用いて筆者が取り組んだ上下総義歯約2,000症例から得た日々の気づきを、独自の模型分析および簡単な活用事例をもってお話ししたいと思います

通常、対面行為の機会の無いコマーシャルラボの技工士は、義歯製作の最初の工程としての咬合床を平均値で作ることが多い。平均値咬合床は正常咬合を基準としていることから、それ以外の対顎関係2級、3級には対応できていない。2級、3級にみられる上下顎の大きさのアンバランスは前歯軸に強く影響するとともに、伴うリップサポートは審美だけでなく、下顎位採得、咬合平面決定にも強く関与する。よって、上下顎の大きさのアンバランスに対応した咬合床を製作することの意義は大きい。

では、どの段階で、どのようにして、無歯顎模型のみから“正常咬合では無い”ケースを見分けることができるのだろうか。私の経験では、顔貌写真があったとしても、直接口腔内を診る歯科医師でさえも、顎変形症などを除き、無歯顎者の上下顎のアンバランスを判断することは難しかった。一方、無歯顎者のclass分類は、咬合器に付着後、初めて上顎前突及び下顎前突といった“見え方”を指すことが多い。しかしそれは必ずしも骨格的な上下顎のアンバランスを指すものではなく、下顎の前方並びに後方への偏位でそう見えるだけの場合も多い。仮に咬合器上で偽の2級、偽の3級に“見えて”いても、上顎に与える機能的、審美的なリップサポートは、上下顎の大きさ的なバランスを基に最初に決定される。ゆえにラボサイドから提供する咬合床は着手時から十分吟味して製作することが望ましい。模型分析によって意図的に設計された咬合床を用いることで、義歯製作に好循環が生まれる。また、模型分析であらかじめ上下顎のアンバランスを推し量ることは機能的な特徴についても思考を拡大しより戦略的な義歯製作へ発展させることができる。